



リステラス星圏史略
古資料ファイル
7 - 3 - 0



『SSSの悲劇』

(発掘整理中)

霧樹里守 is 土岐真扉

1. (@中学2年以降。)

[『\(The LORD of the Rings\) \(7\)』 \(@中学2年以降。\)](#)

2007年4月15日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

1.

四月二日、早朝に、サキは誕生日も待たずに出発した。

サキが自分の誕生日をすっぽかすのは、これが最初だった。

サユリが、トランクを持って、門の所までついてきた。

ヘレナが時間どおりに迎えに来た。

「——サキ、どうしても今日行ってしまうの？ どうしても、わたし——」

「もう、寄宿舎の方には連絡しちゃったんだよ、姉さん。」

そう、そうねとサユリがつぶやいた。そうなのよね……………。

「それじゃ。」

サキの方が先に立って門扉を押し開け、そのまま振り返ってヘレナを待った。

サユリは……サキに何か言いたかったけれど、心の中の想いをどう言葉に表わしたらいいのかわからなかった。

——ごめんなさい——ありがとう——許してね——さようなら。

「……ヘレナさん。」

「はい」

「あの——あの子を、頼みます。あの子、夜寝る時暗いのを恐がるの。それから、それから——」

こっくりと、ヘレナはうなずいた。

一人っ子で育ったわたしでは役不足かも知れませんが、お姉さんにかわって、わたしがサキをひきうけます。

その頼もしさが、この姉妹のすき間に橋をわたすことになるかもしれないと、ふと、サユリには思われた。

朝まだき、もやの中、サキとヘレナはだまったまま郊外の道を歩きだした。

始発の路線バス（リニアモーター）に乗り、地球外周鉄道に乗りかえ、一回途中下車して海べりを歩いてから行こうと言っていたのは、サキの方だった。

ユーロピアン大陸南西部、1000年のその昔、あの大異変のさらに200年も前からそこにあるという全寮制高等寄宿学校（ギムナジウム）——アロウ・スクールには、前々日からの連絡どうり、夕刻、食事の間際についた。

2. アロウの寄宿舍は起床・消燈から食事の献立てに至るまで、（@中学2年以降。）

『 (The LORD of the Rings) (8) 』 (@中学2年以降。)

2007年4月16日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

2.

寮母（ハウスマザー）はいたが、アロウの寄宿舍は起床・消燈から食事の献立てに至るまで、全て上級の舎監生による、完全な生徒自治区になっていて、ヘレナは幸いにも舎監委員会の方に「顔」が利いたので、サキと二人、具合良く東棟の2人部屋におさまった。

翌朝、四月三日、——サキの10回目の誕生日。

ヘレナはだまってショートケーキを二つ買ってきた。

むかひの部屋の、落第（どっぺっ）て再新入したという金髪の長い少女がお茶をわけてくれて、二人はやはりだまったまま、それを食べた。

この日も一日、二人はほとんど口を利かず、四月に入ってからほんの5～6回しか話していない。原因は、サキにあった。

四日、午前中、校内を見学。午後校外の地の理を見て歩く。

夜、夜ふけてサキが声をしのばせて泣いた。

隣のベッドに横たわったまま、ヘレナは何時間もそれを聞いていた。

五日、入学式、入寮式、新入生歓迎祭。

基本科生徒会長が面白い人で、身振り手振りも大げさに、今年の新入生は恐しくていけない。半年後の大難関を気にして今からライバル意識なんぞをむきだしにしていると、ペーパーテスト以前に性格審査で落ちるだろうと嘆息してみせたので一同大爆笑となった。

サキが久し振りに笑った。と見る間に、何がおこったのかにわかにしゃべり始め、昔のこと、未来のこと、どうでもいいこと、大事なこと、話しつかれて寝入った六日の夜明けには、すっかり以前の快活さに戻ってしまった。

六日、生徒総会の間中、ヘレナはサキのことばかり、眠い目をこすりながら考えていた。

委員選びでヘレナは前期に続いて今度は会計委員長となり、サキは、なにかしらやりたそうな顔をしていたけれど、結局何にもなれなかった。

七日、授業が始まり、サキは生徒会新聞部に入部した。

3. 授業開始からしばらくの間、ヘレナにはサキとゆっくり話し合う機会がなかった。
(@中学2年以降。)

『 (The LORD of the Rings) (9) 』 (@中学2年以降。)

2007年4月17日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

3.

授業開始からしばらくの間、ヘレナにはサキとゆっくり話し合う機会がなかった。二人とも新学期を向えて、新しいクラスでいろいろと多忙だったし、夜、部屋に帰れば、明日の授業の下調べに復讐。さらに半年後へ向けての受験勉強がきつくて、眠るのはいつも2時、3時。時には徹夜することもある。二人とも勉強中は一心不乱。わき目もふらずに勉強した。勉強は、楽しかった。確たる目的が間近にせまって、なおいっそう張りが出た。

「あ～あ！ でも……」
一ヶ月して、ついにサキがベッドにひっくりかえって言ったものだ。
「みんな良くもつよ。連日連日3時間睡眠でサ」
「3時間？」
ヘレナに聞きとがめられて、あわててサキは口をつぐんだけれど、ヘレナをごまかすことはできなかった。
二人のスケジュールは、授業と勉強の内容を除けば、ほぼ同じになっていて、それによれば、特別な日に徹夜しない限りは最低4時間から6時間、きちんきちんとヘレナは眠っていた。
問いつめられたサキは返事に詰まって、だって……と言いよどんだ。
「言

(未完)

開票結果、1位、生徒会長 サキ・ラン (@中学2年以降。)

[『\(The LORD of the Rings\) \(11\)』 \(@中学2年以降。\)](#)

2007年4月19日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

1ヶ月が過ぎて、生徒たちが不慣れな宇宙船生活にようやく順応し始めた頃——実になぎにぎしく生徒会選挙が行なわれた。

開票結果、1位、生徒会長——サキ・ラン。

「うっそお～～～っ!!」

それが知らされた時、サキはひどくすっとんきょうな声を出した。

「あたしまだ1年だよ！」

次点だった、2級上のセイ・ハヤミも、あ然としてつぶやいた。

「——人気投票になっちゃったんじゃないのか!？」

実のところ、セイは自分こそ次期会長であると期待していたのだが。

体が小さくて実際年齢よりはるかに子供っぽく見える可愛らしいサキと、『生徒会長』というちぐはぐなイメージをつなぎあわせようとして、ついにこらえきれずに吹き出してしまった。

「アーハッハッハ！ ヒッヒッヒィ！」

つられて、まわりじゅうが笑いだした。

驚いたのと、笑われて頭にきたのとで、半泣きになって、ふくれているのは、当のサキだけである。

普段面倒見の良いヘレナまでが、お腹（なか）をかけて笑いころげていた。

——とにかく。

と、皆がひととおりの笑い終えたあとで、サキは気をとりなおして聞いた。

「他にはなにをだれがやるの？」

留学途上の宇宙船ファーツアロウ船内では、ほとんどの生徒がサキたちのいたアロウ・スクールから来ているので、生徒会のしくみもほとんど同じである。

生徒会長と寄宿舎の自治委員長、及び各種委員会の委員長は生徒全体の投票で選出され、構成委員は各クラスごと。

副や書記・会計などや生徒会長ならば生徒会新聞部長も含めて議長なども含み、長になった人は自分の補佐役を自分で選ぶことになっている。

開票場から素速く情報を集めてきていたマーミドが、写しをとりだして次々と名前を読みあげ始めた。

「生徒会長： サキ・ラン（女）、1-A、11歳。

舎監生最高責任者： アリマ・スン（男）、実技課一年、15歳。

図書管理委員長： ロージェ・マーリ（女）、3-B、16歳。

教課委員長： キール・カース（男）、2-A、13歳。

生活委員長： ヘレナ・ストール（女）、3-B、14歳。

.....そしてわたくし、マーメイド・ブルー（女）、生徒会新聞部長。1-A、13歳。.....なにかご質問はア？」

「.....あら、わたし困るわ」

言いだしたのはヘレナだった。

生活委員の方をやると、サキの方の補佐ができなくなるというのだ。かといって、これは私情から辞退したりするわけにはいかない。

年少のサキを盛りたてて生徒会をうまく運営していくことのできそうな人間は、そうザラにいるわけでもないのである。

皆が思案投げ首、考えこんだところで、しまいにセイが言った。

「おれがやってもいいぜ。」

かくしてファーツアロウ生徒会が発足した。

そして1年.....

マーメイド・フィン

マーメイド・ルカ

マーメイド・ホワイティ

.....って、ああた、『トリトン』の影響なの
バレバレのネーミングですがな..... ☆(^◇^;)☆

序 章（@中学2年以降。）

[『 \(The LORD of the Rings\) \(10\) 』 \(@中学2年以降。\)](#)

2007年4月18日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

序 章

かの世界統一より32年目、C・P11年の春――

地球系星間連邦国家随一の設備を誇る、ここ、冥王宙港（プルータス・ポート）は、初のリスタルラーナ向け一般留学生の出発のためにごったがえしていた。

今日、出発するのは第一期生、200名。

いずれも9～15歳の、全地球星系受験者6億という、厳しい選抜のあげくに留学権を勝ち得た、勝利者たちばかりである。

洋とした未来への期待の方が先に立ち、別れの言葉さえもそぞろになって、むしろ見送る肉親たちの方が不安げに、くどくどと説教のしおさめをしている様子だ。

跳躍（ジャンプ）航法で往復二年という長い道程も含め、一度旅出たら最低5年間は帰ってこられぬ時代の事なのである。

娘や息子たちの勝ち得たものへ、素直に笑って送り出すことができないのも当然の事であつたらう。

――ここに、この話の主人公、やがて裏から世界の歴史をも動かすことになる一人の少女がいた。

昨日、11の誕生日を迎えたばかりのサキ・ランである。

正式名（フル・ネーム）はサキ・ラン＝アークタス。言語改革以前には、すでに彼女らほんの数名を残すだけとなった古（いにしえ）の一族の言葉で、蘭 咲子 と呼ばれていた。

そう、既にして彼女の出生は、歴史の流れの大きく変わる一幕に関わっているのである。彼女こそ、リスタルラーナと地球とが国交を開くことの要因の一つとなった、あの子であった。

昨夜、サキはほぼ一年ぶりに家へ帰り、やはり半年ぶりに姉と挨拶を交した。父も混じえ、父娘3人が、本当に久し振りに集い、サキの出発と誕生日とを祝して、笑った。

無論、既に亡き母をはさんでの、父さえわけて入（い）ることのできない、16と11という年の離れた二人の娘の間の確執は、そのくらいの事で溶けて流れ去るはずもなかったのではあるが、サキは自分自身の心の中で何かが動き始めたのを感じていた。

堰（せ）いていた水戸（みなど）の上をあふれ打ち越して、雪解けの小川が流れ始めるように、わだかまったものが形を変え、少しずつ、心の表にしみこんでいった。

サキは、なぜだか顔中が笑いになって、見送りに来た姉に行って参りますを言い、昔々、よくしたように、首に腕をまわして抱きついてみたりもした。

気づかわしげに見ていたごく親しい幾人かの友人達は、自身、家族たちの見送りをうける中で、遠くからサキのそんな様子に心からの笑顔を贈り、サキもまた手を振ってそれに応えた。

もう大丈夫だとサキは思った。

もう、心の中の憎しみの重さに、耐え切れなくなる夜はないと。
離れて暮す年月が、きっと素直な感情を呼び戻してくれるだろう。

わたしたちはカインとアベルにはならなかったねとサキは笑った。
それは、姉サユリも同じ気持ちであるらしかった。

午前10時、留学生全員に集合がかけられた。
いよいよ出国手続きが始まるのである。
報道陣には退場が命ぜられ、広いホール内では、最後の別れを慌ただしく告げてかけだす者、どたんばになってから母子抱きついておいおい泣きたてる者、様々いて、サキにはその騒ぎが少しおかしかった。

「それじゃ、姉さん。」

さようならと言おうとしてサキは何も言えなくなった。
ややためらうようにしながら、サキの額の上にかがみこんだサユリの唇が触れたのである。
「——元気で。体に気をつけるのよ、サキ……。」
その時、視界にマーミドが入ってきたので、サキはこっくりと一つうなずきかえただけで、すぐに彼女の方へかけだしていった。
「ふん！」おいおいとやっている一群れを片目でながめながら、マーミドは屈折した想いで声を発した。

「あの子、あれだけ母親を嫌がってたくせに……！」
サキはちょっと首をかしげて彼女を見ただけで返事はしなかった。

マーミドは生まれながらにして肉親の名さえわからないのである。

税関の入り口まで来た時、向うからヘレナが走って来た。

「生徒会長というと、みなさんは足が長く、頭が良くて、メガネなどかけた、かっこいい姿を思いうかべるでしょうが……」

([日記だ……☆ これは単なる、日記だっ☆ \(^◇^;\)”](#)) (@??年2月3~4日)

2007年2月13日 [笑いコメント\(1\)](#)

VIP Very Important Person = 最重要人物

また勉強。

“きょう”も勉強

“あす”も勉強

“きのう”も勉強

“つぎ”も勉強

まだ勉強

2/4

いよいよ願書提出一日目。席変えあり、落ちつかず。

……なにか書こうと思ったことが、あったのだけれどなァ。

ああ、そうだ。朝礼の時にね、元生徒会長とたぬきが

ワイワイやっていたのだけれど、新役員が新会長の

おっしゃった……「オレン時は、言っただった」。

果ては新生徒会長が壇上に上って曰く、

「生徒会長というと、みなさんは足が長く、頭が良くて、メガネなどかけた、かっこいい姿を思いうかべるでしょうが……」

要するに、望んでそうなれるものではないから、地のままでやってゆくとやったのだけれど、その間、元会長のそばに並んでいた連中——たぬきとか、わたしとか、——は、クスクスヒイヒイ。

元会長は「あのやろ、あとで首をチョン切ってやる！」「内山！ おまえだって生徒会の一人だろ！」 ブツブツブツ……

退屈しませんな。

コメント



りす

2007年2月16日23:50

おいしい★ こんな楽しい体験してたなんて.....

ぜんっぜん★ 「記憶にございません★」(-_-;)>”

2007年4月26日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

エスパッション・シリーズ 第一話

仮題 S. S. S. の悲劇

第一章 第一節

1.

「.....“まず心があって.....それから行動がある”か、.....ふーん.....。」

通信室のデスクでティリス・ヴェザリオこと通称ティリーがハンドタイプをほっぽらかしにしたまま本に読みふけていた。

「えい！ やっぱ設定が甘すぎるんだ。主人公の性格がはっきり決まってもいないんじゃ、ストーリーの展開だけになっちまう」

彼女は本来このこの中等部の生徒なのだけれども顔慣染（なじみ）の通信士がデートだとかで、無理矢理交替させられたのだ。

ツーン ツーン ツーン ツーン ビーッ!!

彼女が私淑と仰ぐ作家の書いた“小説論”に熱中していたおかげで、相手（むこう）が完全に周波数をあわせてくるまで呼び出し音（コールサイン）に気づかなかった。

「わっ！ はいっはいっ！」

ティリーはこの時間、通信のくる予定はなかったはず.....と思いながら通話スイッチを入れようとしてハッとした。

コールサインがこんなに大きいということは発信源が近くにあるということになる。

「まさか——!？」

とびつくようにスイッチを押すと、目のスクリーン一杯にまちかねたように映像がひろがった。

「アルウ。S. S. S. （スリーエス）！ こちらファーストアロウ。こちらファーストアロウ。.....S. S. S. （スリーエス）、聞こえますか？」

ファーストアロウ号の通信士はティリーさんがあまり幼ないので驚いたらしい。

実際、ティリーは年よりも3つ4つ小さく、せいぜい10～11歳くらいにしか見えないのだ。

突然の事に、あ然としていた彼女は内心すっかりあわてながらも、やっとこれだけ、自分でも結

構堂々としてるなと思える調子で言った。

「アルウ。ファーストアロウ！　こちらS. S. S.（スリーエス）、感度良好。あいにく通信士は不在ですが、あなたがたの無事到着をお祝い申し上げます。……少々お待ち下さい。ただいま司令室に切りかえます。」

これは正体がバレないように内線のモニターは切って司令室に報告し、了解を得た上でスイッチを切りかえる。

ふ——っ！

ティリーは手の甲で額（ひたい）をぬぐった。

「三日分もよけいにワープするなんて！　さすが地球系だ、エネルギーの使い方がハデだね！」
それから彼女は、通信室には自分一人しかいないことに気づいてニッと笑った。

——さすがのあたしでも、あせるとみえる……。

窓からは遠くの恒星以外なものも見えなかった。

しかし、そのどこかに、

（未完）

第一章 スリナエロス・ソロン・スレルナン 1.

『 (The LORD of the Rings) (12) 』

[『 \(The LORD of the Rings\) \(12\) 』 \(@中学2年以降。\)](#)

2007年4月20日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

第一章 スリナエロス・ソロン・スレルナン

1.

「推進装置全機停止。ガントリーロック着結。」

「安全（セーフティ）確認せよ」

「全機能O.K。異常ありません」

「よし、メインエンジンストップ」

「メインエンジンストップ！」

「アイ、サー！ 出力9000.....7000.....6000.....200.....0。エンジンストップ」

「ドッキング終了!!」

ドッキング終了——。

この言葉と共に、大パネルに投影された船橋風景にかたずをのんで見入っていた生徒たちは、皆、安全ベルト解除の緑色灯（グリーンランプ）がつくのももどかしく、わぁっと一斉に立ちあがった。

「着いた！」

「着いたわ」

「S. S. S（スリーエス）だ!!」

まる一年かかって、ようやく留学先であるS. S. S.（スリナエロス・ソロン・スレルナン—リスタルラーナ語で“橋わたしをする”学校）にたどりついたのである。

加速が消えて無重量状態となった船内で、だれかが機密服（スーツ）のヘルメットを放り上げる。

「ヒヤッホ〜〜〜！」

「全員、5分以内に荷物を持って、大ホールに整列〜〜〜!!」

かんだかいサキのソプラノと、セイのテノールが、同時に船室内にひびきわたった。

「アイ・サー!!」

いきおいつけて宇宙遊泳をやった奴と、まじめに走って行った者とがかちあって、出入口で一騒動おこったが、とまれ全員、時間どうりに集合した。

「あなたがたの一挙一動がそのまま地球の評価につながることを……」

「いずれ君たちこそが地球を担う……」

教授たちの一言一言は、短く、はっきりと生徒全員の胸に根をおろした。

彼ら教授連の大半は、S. S. S. にはとどまらない。

このままりスタルラーナ本星まで、更に一年を費やしておもむくのである。

「一年という短い間でしたけれども、わたしたちの意気込みに応え、熱心に指導していただいて、本当にありがとうございました……」

答辞などというバカげた下書きは抜きで、サキは生徒代表として一生懸命お礼の言葉をのべた。

「健闘を祈ります。」

「ありがとうございました！」

短い一言に生徒全員が心をこめて、一礼すると、生徒会、中央委員会を先頭に、皆次々と憧れの巨大な構築物の中へと歩み入った。

「さあ、これからが本番だぞ」

「そうよ、地球人代表がどこまでやれるか、リスタルラーナに見せてやりましょうよ」

「その意気だ。この一年の特訓であたしたち全員、リスタルラーナの教育水準にちゃんと追いついているんだから」

「追いつけ追いこせ」

「ホント、あとはどこまで自分を磨けるかよね」

「努力あるのみ！」

「オ——ッ！」

アッハッハ———！

ほんの少し不安の入り混じった興奮で、だれもが口々に未来への希望を語りあった。

「1学年、10クラス、300名でしょ？ なんとしても上位50位リストに食いこもうよ。」

「なんの。卒業までには総代になってやらあ：

「お——っ！ このやろ一大きくでたなっ」

サキもまた例外でなく、ヘレナやセイ、マーミドたちを相手にして、一同の先頭でにぎやかに笑いあっていた。

——自分の身の上にこれから何が起きようとしているのか、その時のサキには予測だにできない事であったから。

が、慣れ親しんだファーツアロウ船内から出、さすがに緊張からぴんと静かになって、S. S. S. への移乗通路を渡って行く一行の先頭にあって、彼女はだれにともなくつぶやいた。

「S. S. Sの現生徒会長って、人間離れして優秀な人なんだってね……。」

サキが何を思ってそうつぶやいたものか、今となってはもう知るすべもない。

『 (The LORD of the Rings) (13) 』

[『 \(The LORD of the Rings\) \(13\) 』 \(@中学2年以降。\)](#)

2007年4月21日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

広大な宇宙のまっただなかに浮かぶ、巨大な中継所（ストップオーバー）。それは、片道2年に渡る地球——リスタルラーナ2星系間航路上最大の宇宙港（ポート）と、完全自治の学園王国S. S. S（スリーエス）との2局からなる、いわば亜鈴（あれい）型をした構築物だった。ファーツアロウの地球人留学生団は、まず宙港（ポート）で簡単な人員照合を受け、無重力地帯である中心部のスリップダウンを利用して、2分たらずでS. S. S. 側の玄関ホールにたどりつく。

サキを始めとした中央委員30名を先頭に、一同は厳かに、かつ胸をはって堂々と、そのS. S. S. 全生徒の待ちうけているホールの中へと歩みでて行った。

転入式、対面式、歓迎パーティーと、にぎにぎしい歓迎騒ぎの中で、ある一瞬からずっと、サキは、だれかに“視られ”ているという感じから逃れられなかった。

首筋をつかむような視線を感じて、油断なくあたりを見渡してみても、騒がしさの中でだれ一人それらしい人物は見当たらない。

それでいて、“見つけた”“捕まえた”といった感じの視線が体じゅうはっしりと抑えこんで、息苦しいくらいなのだ。

耐えきれなくなって、サキは早めに歓迎パーティーを抜けだした。

疲れたからと偽わると、心配して、サキの憂慮の的だった現S. S. S. 生徒会長フォーラが部屋まで送りましようとして来た。

一見して評判どうりの超人としれる彼女は12歳。3年生。実際にはサキと一つしか違わないにもかかわらず、体格、頭脳、対人の折衝など、全ての点で、4つか5つ分は差をつけられているなアとサキは思い、年不相応に大人びた物腰に、9ヶ月前に別れて来た姉、サユリと共通する、一種の冷（れい）らかなふんいきを見出して、深層心理に複雑な波がたつのをふせげなかった。

『なにか一種、離れている。』

と、サキはこう日記に残している。

『ガラス張りの向うから、眠ったままの心で“優しさ”を造り届けているような感じがする』と。

この時から半年後の中央委員会選挙※までの間の、この二人の会長候補の心の経移こそが、後々の悲劇をひきおこすことになるのである。が、これはまだ当分の間表面に浮かんではない。

※ S. S. S. に生徒自治は発達しておらず、生徒会は存在しない。

二週ほどの間、サキの日記にはしばしばフォーラに関する酷評が書かれた。

セイ・ハヤミの事も含めて、S. S. S. に来て以来、急に、他人（ひと）には言うべきでない秘密がふえたサキは、平常のおしゃべりは前にも増してにぎやかになたのに、もう容易に実のある真の心をこぼさなくなって、その分、おもしろいほどのスピードで、“雑記帳”ノートが増えていった。

そんなサキが、ノートを人に見せなくなって、以前の、イラストとだじゃれでいっぱいだった頃からの愛読者たちは、つまらないと文句を言っは、「反抗期ね」とからかったが.....

(未完)

~~に見受けられるサキの様子を、遠くから、より深い領域においてうかがい視ている人間がいた。~~

~~S. S. S. 名物の教課委員長、通商ティリーさんことティリス・ヴェザリオである。~~

~~「.....ねえ。」~~

~~眠くなって、なんとはなしにpけらっとしていたサキのかたわらへ、つつつと一人の少女がよってきた。~~

~~長い黒髪を二つのお下げにした、S. S. S. 名物の教課委員長、ティリーさんことティリス・ヴェザリオ。~~

~~2級上点つまりヘレナたちと同学年の彼女は、背の低さにおいてサキと張り合っている。~~

『 一、 スクール オブ 宙間中継基地 (スペースストップオーバー) 』

[『 一、 スクール オブ 宙間中継基地 \(スペースストップオーバー\) 』 \(@これは中学1年だ!!\(^◇^;\)と思う☆\)](#)

2007年4月27日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

一、 スクール オブ 宙間中継基地 (スペース・ストップオーバー)

地球-リスタルラーナを結ぶ長い長い、二年間にも渡るワープ航路のちょうど中間点、つまり地球から一年行程のところに巨大な人工衛星があった。

それは長い航海の際に燈台の役目をし、また疲れた船の修理やエネルギーの補給をすることも可能だった。

そして、二星間国家 (地球系星間国家連邦とリスタルラーナ系連合) 間の国交樹立とともに建造されたこの宙間中継基地にはもう一つの機能 (システム) があった。

すなわち、リスタルラーナ最高の教育機関であるスリナエロス・ソロン・スレルナン。

各国の学生たちは、地球語の『スクール オブ スペース・ストップオーバー』と掛け合わせて、三年前にリスタルラーナ首都惑星上から移転して来たこの学校をS. S. S. (スリーエス) と呼んでいた。

S. S. S. (スリーエス) には幼児科 (3~5歳) と基本科 (6~8歳) を除いた全ての教育施設といくつかの専属研究所があり、位置の関係から必然的に全寮制、両連邦最高の教育を受けられる上に、授業料その他は一切無料である。

ただし、この学校に入学するには、基本科卒業の際に全星の生徒が受ける学力適性検査をへて、およそ千倍近い競争率の各星立の特殊要員 (エリート) 養成学校 (スクール) に入学し、その中からさらに二百分の一の割合で選ばれるのを待たねばならなかった。

しかも、こうして入学した百二十名の生徒も、半年おきの進級試験のために、卒業時には3分の2の八十名に減っているのだった。

(※「天上にかかる雲の上の道のはるかかなたに輝く虹の橋の向こうのお城」……という、実にハズカシイ絵が色鉛筆で描いてあります……………☆ (+^◇^;+) ☆)

(*ついでに言うなら日記や作文用の「たてがきノート」使用だ!!)

『 二、 地球留学生 』

『 二、 地球留学生 』 (@これは中学1年だ!!(^◇^;)と思う☆)

2007年4月28日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

二、地球留学生

リスタルラーナ連合政府がS. S. S. (スリーエス) への地球留学生の編入を認めてから三年。地球の教育制度が改変されてから五年。

今、第一回留学生の乗った船がS. S. S. (スリーエス) 内部に入ろうとしていた。

ファーツアロウという名のその船は地球系連邦から選び抜かれた精鋭、100名の学生たちを一年間かけて運んで来たのだ。

(※「金色に輝く弓と矢の形の宇宙船」と、それを司る
宇宙のトリトン神(?) みたいな色鉛筆のイラストあり.....☆)

(ていうか、この原稿は挿し絵が多い「絵物語」形式です☆)

(^_^;)>”

「どうしたの、サキ？」

ヘレナが、ぼんやりしているサキを優しくつついた。

「足をはさむわよ。」

彼女たちは、ファーツアロウとS. S. S. (スリーエス) をつないでいるベルトウェイを、ファーツアロウの生徒たちの先頭になって通っていた。

なぜなら、彼女たちは生徒会役員だったので。

とりわけサキの方は一年生にして生徒会長になった人気者で、今年13歳のヘレナと11歳のサキは、いつでもいっしょにいた。

というより、一人っ子のヘレナにはサキが妹のように思え、一方、地球にいるサユリと別れてきた姉さんっ子のサキは、なにかあるたびにヘレナの所へ相談に行った。

二人とも見かけによらずさびしがりやなのだ。

(※制服姿のサキとヘレナのツー・バストショット。)

「どうしたの？」

もう一度ヘレナが聞いた。

サキがすぐに返事をしないとは珍しい。

「ん、ちょっとね。」

ファーツアロウの一行はベルトウェイから降りて歩きだした。

いよいよS. S. S. (スリーエス) の内部に入ったのだ。

広いロビーで身分証明書(カード)との照合。

(※ セイ・ハマミの正方形のカードのイラスト。)

なにしろS. S. S. (スリーエス) は政府が経営しているにもかかわらず、政府の干渉を許さない。

学生と教師だけで独立した国、より良い教育環境を造りあげることだけを目的とした完全に自由な場所なのだ。

照合といってもコンピュータが処理するのだからたいして時間はかからないのだが、それでも一度に百名となれば大変だ。

コンピュータにカードをさしこみ、各自の指紋、網膜、声紋と照らし合わせて本人かどうかを確認する。

最初に済ませたサキが、次に検査機(チェッカー)から出てきたヘレナに言った。

「ねえヘレナ。わたし心配になってきちゃった。」

「?なにが？」

いつも用件ぬきで結論を言うのはサキの悪癖のひとつ。

「ほら、あの.....なんていったっけ!? S. S. S. (スリーエス) の生徒会長。」

「ああ、たしかフォ.....なんとかベルアイルって名前よ。それがどうかしたの？」

(※ 悩みをうちあけるサキと応じているヘレナの絵。)

「.....うん。つまりねエ、聞くところによるとそのフォ.....なんとかさんってすごい超人的な人らしいじゃない。」

実際、そのフォなんとか、つまりS. S. S. (スリーエス) の中央委員長フォレル・シェットランド・ベルアイルという少女は、ある日突然、転入不可能といわれていたS. S. S. (スリーエス) に現れて以来、每期每期全科目首席という離れわざをやってのけ、さらに、だれにでも優しいその人柄と適格でいつも冷静な判断からおして、これも每期連続で中央委員長をつとめていた。つまり、地球で言う生徒会長のような役である。

(※ 自信なげに首をかしげていじけるサキの絵。)

「それにひきかえ、わたしの方は苦手科目は及第ギリギリしかとってないでしょ!? もし生徒代表ってことで比較されたりしたら……」

「バッカねえ!!」

要するにそれが不安なのだ、とサキが話しを続ける間もなく、後ろからマーメイドとセイが割り込んで来た。

(※ 手にカードを掲げて勢いよく歩いてくるマーメイドの絵。)

マーメイドは遅刻常習犯ナンバーワン。生徒会新聞の腕利き編集長、兼、生徒会書記だ。実際どちらが本業なのか本人にもわからない。

そのマーメイドがバンとサキの背中をたたいて言った。

「そのくらい心配しなさんな。会長は悪くても生徒は優秀なんだから。ファーツアロウの生徒はS. S. S. (スリーエス) なんかにひけはとらないわよ。」

それでもサキの気は晴れず、彼女は抗議するように言った。

「——でも!!」

「え!?!」

「なんだかわたし、すごおく嫌な予感がするのよ。それにそのフォなんとかって生徒会長のことが頭から離れないの。」

サキのその真剣な口調に三人は一瞬しんとした。

なぜならサキの予感的中率といえは生徒間でも評判で、試験前ともなれば多勢で出題のヤマを聞きに来るぐらいなのだ。

(※ 「悪い予感」を訴えるサキの顔。)

しばらくしてからセイがほがらかに、(それでも少し心配そうな顔をしながら) 断固とした口調で言った。

「心配するなよ、なにかあってもオレたちがついてる。」

(……そうとも! オレのサキを泣かせるようなやつがいればオレが許さん!!.....)

実際、背が高く色のあさ黒い、スポーツマンタイプの生徒会副会長セイ・ハヤミは、半年前の生徒会役員選挙の前後からサキが気になりはじめ、今では心の中でサキの名を呼ぶ時、必ず「オレの」と修飾して呼んでいるのだった。

もちろん、体格、精神年齢ともに成長の遅いサキは、およそそんな事を考えたためしもなく、セイとしても当分うちあける気はなかったが……。

(※ とか言いつつサキの肩に手を置いてカッコつけてるセイの絵……☆)

(^◇^;)”

……セイに言われたサキは、自分が彼らを心配させていることに気がついたので、大急ぎで今までのゆううつそうな顔を引っこめ、さも安心したという風になっこり笑って一言、言った。
「それもそうね!!」

(※ なっこり元気なサキの絵)

サキがあまりにも自然に、本当に必然的とでも言えるぐらいにごく当然という顔をしてそう言ったので、マーメイドやそばで四人の話を聞いていた他の生徒会役員たちはすっかりだまされてしまい、ファーツアロウの中では一番良くサキを知っているセイやヘレナでさえしばらくはその自然な不自然さに気づかなかった。

つまり、まるでセイの一言で本当に安心したように見えるサキが、実際は自分を愛してくれている二人——セイとヘレナ——に心配をかけまいとして無理に自分の心を隠してしまったことにだれも気がつかなかったのだ。

実際、巧みに話題を切り換えて、セイといつもの（面白いと評判の）痴話ゲンカを始めたサキはとても無邪気にかわいらしく笑っていたので、仮にサキの本心を知っている人がいたとしてもかえってその事を疑いたくなっただろう。

それでも、にぎやかなだじゃれの応酬の合間にサキがふっと遠い目をしたのをヘレナは見逃さなかった。

——しかたがないわ。

ヘレナは心の中で大きなため息をついたがなにも言わなかった。

サキがわたしたちに心配をかけたくない……と思っているのなら、だまされたふりをしていなければ、今度はサキがよけいな気を使うようになるわ。

(※ 憂鬱に落ち込むヘレナの絵。)

やがて生徒全員の照合が終り、生徒たちは再びベルトウェイに乗った。
次のエアロックを通りぬければ、そこにはS. S. S.（スリーエス）の生徒が待っているのだった。

『 三、 中央委員長フォーラ 』

『 三、 中央委員長フォーラ 』 (@これは中学1年だ!!(^◇^;)と思う☆)

2007年4月29日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

三、 中央委員長フォーラ

フォーラは、地球留学生歓迎のために広い集会室に並んだ生徒たちの中央に、ひどい頭痛を抑えながら立っていた。

中央委員長として留学生歓迎の準備の指揮をしてきた彼女はここ数日間ろくに寝ておらず、そのためちう30分前にも貧血を起して倒れたばかりだった。

にもかかわらず彼女は強制覚醒剤を服用してでてきたのだ。

実際、歴代のただの中央委員長たちならいざしらず、フォルル第三百五十二代委員長の出席しない重要式典などとても考えられない。

フォーラの後見人であり、先程気を失った彼女を医療セクションまで運んで行った星間屈指の女性科学者マリア・ソレル女史も、親友のティリーと共に医師（ドク）の注意を無視して起き出してきたフォーラを見つけると、まだ顔色も青いままなのに、と思ったが、無理に休ませることはしなかった。

それにしてもフォーラの頭痛はまったくひどいもので、フォーラは、彼女を心配してそばにピッタリとついているティリーにまで頭のガンガンいう音が聞こえるのではないかと.....と、混乱した頭で考えるともなく思っていた。

(未完)

『 (習作) 』 (@中学1~2年?) 地球人留学生団のための歓迎パーティーは、会場の準備もすっかり終って、あと15分ちょっとで開会宣言がなされるはずでした。

『 (習作) 』 (@中学1~2年?)

2007年5月5日 [連載 \(2周目・地球統一~ESPA\)](#)

——おかしいなあ……

11歳のサキーラン＝アークタスはきつきからしきりに後ろの方ばかり振りかえって見ていました。

どうやらあのここへ着いて以来つきまといってくる視線は三つ別々の方向から来ているようで、~~一つはわりあい近く、年長の(リスタルラーナの)生徒たちが固まっている方、もう一つはずっとむこうの壁面の、中三階ほどの高さにもうけられた、ホールを見おろす廻廊~~

ヘレナから見て

地球人留学生団のための歓迎パーティーは、会場の準備もすっかり終って、あと15分ちょっとで開会宣言がなされるはずでした。

すらりとした薄桃色の上品な民俗衣裳(ドレス)の、胸に澄んだ真珠色のバラのつぼみのコサージュをつけて、ヘレナは静かな色合いの肩にうちかかる金髪は結い上げずにおいたままで、少し早めに会場へ出て来ました。(※ヘレナのドレス姿のイラストあり。)

見ると、ホールの反対はずれの方で、妹同様でもある三つ年下の“かわいい生徒会長”(リトル・チェアマン)サキが、しきりにそわそわきょときょとしています。

何かしらと思って近づいて行くと、向うも気づいて寄ってきました。

「どうかしたの? サキ」

そろそろ開会になるかという、地球人交換留学生団歓迎のパーティ会場で、11歳のサキはなぜかしら落ちつかなくさせる二つの視線を感じて、そわそわと不安げにあたりを見回していました。

不可解なそのうちの一つは、どうやらリスタルラーナ側の、S. S. S. (スリーエス) スクール中央委員長、フォレル・シェットランド・ベルアイル——通称フォーラ——からのものであるようです。

サキが振り向いて見た限りでは、彼女は決してサキの方を見ていたりしなかったのですが、それでもサキには不思議な事に、フォーラの全神経が自分の上へ集中しているのがわかりました。

——もう一人、見つめているのはだれだろう？

いや、それより、サキにとってはフォーラの視線の中に混じっている、淡い憎悪のようなさしこむような鈍痛感の方がより気にかかることでした。

——どこかで感じた事のある感覚.....

サキの瞳はぼおっとかすんで可視光線を捕えなくなり、束の間彼女は無意識層の中で古い記憶をまさぐってみました。

ぽん！

だれかに肩をたたかれて、サキは思わず声をたてるどころです。

「ぼうっとしてどうしたの？ サキ。かわいい生徒会長さんはあたしたち第一陣留学生（ファーツアロウ）の代表なんですからね。しっかりしててちょうだいな。」

三つ年上の親友・ヘレナ・ストール。

「そんなの知らないよオ副会長。.....あのね」

“オチ・カ”のサキは伸びあがってヘレナに耳うちしました。

いつものようになると甘えた素振りだと努力はしましたが、忌まわしい記憶がからまって、どうしても声だけは不安な響きをともなってしまいます。

「あそこにいる中央委員長（フォーラ）ね、昔のサユリ姉さんと同じ目をしてわたしを見てる。」

ヘレナの顔がさっとこわばりました。

言わない方が良かったのかも知れないと後悔するけれど、いつも考えるより先に舌が滑りだしてしまうのがサキの欠点なのです。

ヘレナが目顔で問い返すのに、サキはうなずいて考えました。

何にしても、一度としてはずれた事のないサキのかんが不安を告げている以上、少なくともヘレナにだけは話をしておいた方がいい——何が起こるのかはわからなくても。

[『長寿人 - 超人 - 超寿人』 \(@中学2年?? 3月15日\)](#)

2007年2月15日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

(歓迎パーティーにおけるS.S.S生徒総代フォーラと
ファーツアロウ生徒会長サキの、ツーショットイラストあり。)

長寿人 - 超人 - 超寿人、(超樹人、とか)

『超少女たち』 エスパッションシリーズ編 第一話

S.S.Sの悲劇（仮題）

主題 “だれも悪くはないのになぜ人は不幸になるか”

——答えのない疑問

材料

- ・サキの「傷つけないための無邪気さ」に、いらだつフォーラ。
- ・ティリーさんの人間監察と生き方。
- ・「口ではうまく言えないわ。でもね、会ってみれば確かにわかるはずだと思うのよ。」New Type (?) を探しているソレル女史のなぞ。
- ・セイのサキに対する感情の不安定さ。
- ・らしくないフォーラの行動の変化。
- ・生物部が採取した“樹”の研究をするフォーラ。
- ・フォーラのソレル女史に対する慕情。
ソレル女史のサキに対する関心。
- ・フォーラの過去。
- ・憎もうとして憎むことのできない存在・サキ。
- ・サキとフォーラの人気のありかたのちがい。
- ・サキの過去、しこーさくご
- ・熱のひいたあとの超能力問答。
- ・純粹さを装おうサキの思惑と逆の結果。

- ・ 学術のみにたよっている、劣とう感をおぎなうためのフォーラのプライド。

“樹”は樹でなく、老いさらばえ生命維持装置の中でしなびているものかもしれない。それは憎しみにかぎらず全ての感情・意志エネルギーを増複する。

——なぜわたしを倒そうとするのだ。わたしはわたしが生きるために必要なことをしているだけだ。

——それがわたしたちのあるべき姿にかんしょうするからだ！

山ほど残っているレポートの空白はほったらかしにしたまま、サキは鉛筆をくわえて宙をにらんでいた。

あ～～～。こんな調子じゃ赤点確定だなあ。

でもサキは点数のための勉強よりも「今、考えること」を大事にしたかった。

もっとも、化学の参考書がえらく難しかったせいもあるが——。

モチーフ

◎ドッキング

- ・ サキとヘレナとファーツアロウ
- ・ フォーラとティリー、（フォーラは失神しないこと）
- ・ サキの不安。
- ・ 入学式、サキ、フォーラを好きになる
- ・ 部屋割り、サキとフォーラ同室になる
- ・ ティリー、サキの本質をみぬく。

「人にこうだと思わせたかったら、

言葉だけじゃだめなんだよ」

- ・ 歓迎会返礼のための劇の練習。
- ・ 試験。サキ、二科目でフォーラを抜く。

3/19 (狙撃銃を担いだ鋭と、光線銃を持ったサキのイラスト)

- ・ ルツィファー (ルシフェル)
トイフェルの別名。原意は、光を運ぶもの。
- ・ サタン
ヘブライ語で地獄の王者。敵対者、悪い天使。
- ・ 火の精 (火の王) は他ならぬトイフェル、サタン、又はルツィファーである。トイフェルは唯一の火の精で

~~Lord 支配者、王者、領主、貴族、~~

~~My Lord 閣下!~~

~~the Lord of Lords~~

~~Battle 戦い、戦闘、会戦。~~

2006年12月24日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

3/29

地図が書けるようになるまでは、ダレムアスには手をつけぬこと！

◎ 設定表

題名 未定

枚数 600枚前後

分野 S・F、超能力者。

舞台 S・S・S、人工の独立した宇宙島

時代、宇宙平和歴 11～12

主要登場人物

主人公	サキ・ラン	地球人、♀、11歳	
	ヘレナ・ストール	// ♀ 13歳	
	マーメイド・ブル	// ♀ 14歳	
	ティリス・ヴェザリオ	リスタルラーナ ♀	14歳
	フォルル・S・ベルアイル	// ♀ 12歳	
	ロジャー・コール	// ♂ 12歳	
	ソレル女史	// ♀ 29歳	
	ドク・マリア	// ♀ 31歳	
	学長	// ♂ 50代	
	ティリーの叔父	// ♂ 20代	
	教授	地球人 ♂ 30代	

『 長寿人 - 超人 - 超寿人 』 (@中学2年?? 3月15日)

『 長寿人 - 超人 - 超寿人 』 (@中学2年?? 3月15日)

2007年2月15日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

3/14 まず、マーシャが、

いつ、

なぜ、

だれによって、

どこから、

どうやって、 地球に来たかを決定すること！

3/15

それが決定するまでは、ダレムアスはおあづけ!!?

再び先じゃないサキの方へ?

何回くりかえしてるんだらうね? このいったりきたり.....

(歓迎パーティーにおけるS.S.S生徒総代フォーラと

ファーツアロウ生徒会長サキの、ツーショットイラストあり。)

長寿人 - 超人 - 超寿人、(超樹人、とか)

『超少女たち』 エスパッションシリーズ編 第一話

S.S.Sの悲劇 (仮題)

主題 “だれも悪くはないのになぜ人は不幸になるか”

——答えのない疑問

材料

- ・サキの「傷つけないための無邪気さ」に、いらだつフォーラ。
- ・ティリーさんの人間監察と生き方。
- ・「口ではうまく言えないわ。でもね、会ってみれば確かにわかるはずだと思うのよ。」New Type (?) を探しているソレル女史のなぞ。
- ・セイのサキに対する感情の不安定さ。
- ・らしくないフォーラの行動の変化。
- ・生物部が採取した“樹”の研究をするフォーラ。
- ・フォーラのソレル女史に対する慕情。
ソレル女史のサキに対する関心。
- ・フォーラの過去。
- ・憎もうとして憎むことのできない存在・サキ。
- ・サキとフォーラの人気のありかたのちがひ。
- ・サキの過去、しこーさくご
- ・熱のひいたあとの超能力問答。
- ・純粋さを装おうサキの思惑と逆の結果。
- ・学術のみにたよっている、劣とう感をおぎなうためのフォーラのプライド。

“樹”は樹でなく、老いさらばえ生命維持装置の中でしなびているものかもしれない。それは憎しみにかぎらず全ての感情・意志エネルギーを増殖する。

——なぜわたしを倒そうとするのだ。わたしはわたしが生きるために必要なことをしているだけだ。

——それがわたしたちのあるべき姿にかんしょうするからだ！

山ほど残っているレポートの空白はほったらかしにしたまま、サキは鉛筆をくわえて宙をにらんでいた。

あ～～～。こんな調子じゃ赤点確実だなあ。

でもサキは点数のための勉強よりも「今、考えること」を

大事にしたかった。

もっとも、化学の参考書がえらく難しかったせいもあるが——。

モチーフ

◎ドッキング

- ・サキとヘレナとファーツアロウ
- ・フォーラとティリー、（フォーラは失神しないこと）
- ・サキの不安。
- ・入学式、サキ、フォーラを好きになる
- ・部屋割り、サキとフォーラ同室になる
- ・ティリー、サキの本質をみぬく。
「人にこうだと思わせたかったら、
言葉だけじゃだめなんだよ」
- ・歓迎会返礼のための劇の練習。

- ・試験。サキ、二科目でフォーラを抜く。

.....なぜか？.....次のページには、
大地世界ダレムアスの初期の地図があります.....(^^;)

○ 大地が広がっているから、創世記時代の距離感は通用しない。

海（魚）

火の山（噴煙）

マドリアウイ神殿

始祖平原（ハジメノハラ）

大地の背骨山脈

3/19 (狙撃銃を担いだ鋭と、光線銃を持ったサキのイラスト)

~~—ダレムアスの神々—~~

~~—ダレムアスの神は、—~~

~~—守護神(まもりのかみ)と師導神(おしえのかみ)などにわかれ、—~~

~~—母神であるマリアンドリムは命、他の主神5神は国人のために—~~

~~—それぞれ水と木と石と—~~

・ルツィファー (ルシフェル)

トイフェルの別名。原意は、光を運ぶもの。

・サタン

ヘブライ語で地獄の王者。敵対者、悪い天使。

・火の精(火の王)は他ならぬトイフェル、サタン、又は

ルツィファーである。トイフェルは唯一の火の精で

~~Lord 支配者、王者、領主、貴族、~~

~~—My Lord—閣下!~~

~~—the Lord of Lords—~~

~~Battle 戦い、戦闘、会戦。—~~

(サキ・ラン・アークタス。たぶん10歳くらい?)

(サキ・ラン・アークタス。たぶん10歳くらい?)

2016年8月17日 リステラス星圏史略 (創作)



何故かここにサキがいた。(^^;)

(ヘレナ 12歳) (たぶん中1)



『 漫画のネーム☆ (2-1) 』 (@これはおそらく小学校5年か6年??) A^-^;)”。

2007年5月21日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

(1頁) *フォーラ (耳のとんがってる「宇宙人」な美少女) の横顔アップ

サキ——

明るくてむじゃきなあなた

きっと 地球 (テラ) の黄色い太陽 (ソル) は

あなたのようにあたたかいのでしょうか——

私はあなたが好きでした

もしもあの時

あんな所へ行かなければ……

(2～3頁) *航行中の「宇宙船ファースト・アロウ号」

(矢型のアポロ宇宙船に弓型の推進装置をつけたようなやつ) 全景。

- 三××〇年 一月 リゲルより波動宇宙船 (ワープロケット) 飛来
リスタルラーナよりの和平使節と名乗る
- 三××一年 五月 リスタルラーナ・地球間に和平・通商条約定結
- 三××三年 二月 地球側和平使節および一流学者陣リスタルラーナへ
- 三××五年 九月 両星の中間点に宇宙中継基地
(スペース・ステーション) を設立
これにより両星間が二年に短縮される
- 三×一〇年 四月 宇宙中継基地学校
(スペース・ステーション・スクール) 設立
両星間の優秀な人材の教育・養生を目的とする
- 三×一一年十一月 地球側のS・S・S留学生
ファースト・アロウにて出発

二星間国交略歴 三×一二年十一月 記

S.S.S. (スリーエス) ——宇宙中継基地学校——の悲劇

(4頁)

1コマ目 パン！ パチパチ パパパ (擬音)

*古典SF風「未来のコンピュータ」のキーボードを叩く手指

2コマ目 「ON」のスイッチを押す指アップ

3コマ目 「S.S.S. SPACE・SCHOOL——

宇宙中継基地学校 NAN TOKA KAN TOKA

BUTU BUTU ANTA YONDA ?」……と、

書いてある紙がプリントアウトして出て来る……A^-^ ;)

4コマ目 それを破り取るサキの手。

5コマ目 (大ゴマで) 古典SF風衣装のサキの全身像と、

「ウフッ」とか満足そうにウィンクしながら笑っている顔アップ。

「サキ・ラン12歳——」のコメント

(5頁)

もう何回めかな

こうやってS・S・Sの

写真を見るの—— 遠い目のサキ

「でも

もうまつことは

ないんだ！

あと1時間——」

「そう

あと1時間で

S・S・Sに着く！！」 劇的に振り返るサキ

「なんたって くん練期間は

長かったもんねー♪

いくらリスタルラーナの

教育水準に合わせる

ためとはいえ」 無意味に踊り出すサキ

「地球で一年

船内で一年

計二年☆」

「やっと着いた！」

きゃ〜♪と、バレエのポーズで喜ぶサキ

「生徒会長」 ぎくっとするサキ

「あ、あヘレナか！」 赤面しつつ振り向くサキ

「あいかわらずねサキ！」 壁になついてクスクス笑うヘレナ

ヘレナ・ストール 13歳 (コメント)

「あなたでなきゃやらないわよ こんなアホなマネ……」

「フンドーセ！」 赤面してムクレかえるサキ

(6頁)

「で、何の用？ 副会長」

「教授がね

接続 (ドッキング) 操じゅう

私たちにやらせてくれるって」

「ホント!？」

「集合は30分後！」

「じゃ、おくれないでね」

「by」

「OK! すぐ行くわ」

「すごい! 最高だ!!」

接続 (ドッキング) なんて高等技術じゃない!!」

(再びクルッと踊り出すサキ)

「中等課で

高等実習できるとは
思ってもみなかった♪」 ルンルン
「今日はついてるな——」 (部屋から駆け出すサキ)

「……ルン!？」 (はたと気が付くサキ)

(7頁)

「わ～～～っ!!」

「うかれてて
おくれちゃった～～
まにあう
かしらん!」
あと一分 カンカンと靴音させて走るサキ

「オッハヨー!!
生徒会長が遅こく?」 (後ろから追いついてきたマーメイド)
「マーメイド」

「ま、私も
人のことは
言えないけどね」 (舌を出すマーメイド)
通算15回目!
「アハハ♪」

「笑うな!」
「アハ♪
すべりこみだよ～」 (二人して廊下をバタバタ走る)

シュッ (「自動ドア」!!が開く音)

「おそ～～～い!!」

「二人ともたるんでるぞ!!
十五秒前

ギリギリじゃないか」 (セイ)

「すぐ来るって言ったくせに」 (ヘレナ)

「「すみません」」 (二人一緒)

(口笛吹いてあさって向きながらのマーと、ひたすら頭を下げるサキ)

(ドッと笑いころげる生徒一同)

(8頁)

「静かに！！」

「各自席（シート）に

つきなさい

これより

接続実習を始めます！」

2007年5月22日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

By M. T

制作協力 K.T

(1頁)

——父さん

母さん

元気ですか？ (カチカチ・カタタタ……とキーボードを叩く両手指) (※)

——もうじき

姉さんの定期公演が

ありますね——

今年は見に行け

ないので残念です

——テープを送って

ください (カタカタカチカチ擬音と、サキの横顔)

ここの生活は順調です——

この間S・S・S (スリーエス) と交信しました

今日、向こうとドッキングします

——地球 (テラ) からの留学第一期生

生徒会長としての役目も

もうじき終了です

SSS (スリーエス) の生徒会長は——

「サキィ〜ツ」

「ここよ——

何か用!？」

「ああ サキ

ここにいたの——」

「あなた電話（テレホン）のスイッチ
切ってるわよ」

「教授（プロフェッサー）が
呼んでるわ
30分後に集合」

「生徒会役員は15分前に集まれって」

「サンキュー

ヘレナ

すぐ行くわ」

「どういたしまして

小さな生徒会長さん♪」（サキの額の横にキスするヘレナ）

「じゃーね♪」（去って行くヘレナ）

呼び出しがかかりました

30分後にドッキングです

——では またあとで——

(2頁)

「急いで——っ！

委員はあと三分で

集合よ！」（廊下を走る委員たち）

(走るサキを追い抜くマーメイド)

「生徒会長が

ちこく！？」

「面目ない

マーメイド」

「ま

私も

同罪だけどネ」

オーやっとなつた！

「ちこく
してなきゃ
いいんだけど
通算15回目！」

(シュ……と開く「自動ドア」)

「お……そ～～～い！」

「生徒会長のくせに
だらしないぞサキ」

「15秒前
ギリギリ
じゃないか」 (セイ)

スゴイ声！

「じゃ とにかく
まにあったのね」 (マーメイド)

((ドツと笑いころげる生徒一同)

「よく言うわ

他の人は

全員

来てるのよ」

「すぐ来るって言ったくせに」 (ヘレナ)

「スイマセン……

ヘレナ副会長」 (しょげるサキと笑い転げる生徒たち)

「静かに！！」

「ただ今から

S・S・S (スリーエス) との

ドッキングを

行います！」（ヘレナ、片手を上げて宣言。静まりかえる生徒一同）

(3頁)

「計画どおり
ぼくたち
だけの
手で」（ヘレナを追いやってウィンクしながらセイ）

(サキの笑顔のアップと、わぁっと盛り上がる生徒一同)

「そうと決まれば
こっちのものよ♪」
「全員
配置につけ！」（いきなり仕切るサキ）

「お～～～っ！」（拳をあげる生徒一同）

「『念願かなったり』
ね！！ サキ！」（シートにすべりこみながらヘレナ）
「アハ♪」（同、サキ。背後で慌ただしい準備の風景）

「S. S. S.（スリーエス）
前方二〇〇〇！！
相対速度〇.三五」
「メインエンジン停止！！
進路5.....3.....1.....ストップ！」
「右前方にアステロイド！！」
「ミサイル発射！」

「重力
太陽3.5
月0.8
アステロイド0.05！！」
「アステロイド破壊」
「針路修正0.05！！」

「動かない！！」

「急いで！！」

「こちらファーストアロウ

S. S. S. (スリーエス) 司令部 (キャビン) ! ?

接続 (ドッキング) 位置を

指示願います.....」 (サキ)

(※ サキの打っているコンピューターの画面に、

「Himana hito ha yome !

Hima de nai hito ha

Musi site kekko~

Baka banasi ni

Tuki ai tai hito ilu ka

gika n no mu da da

a a iso gasii」とか、書いてあったりする.....w)

『 漫画のネーム☆ (2-3) 』 (@これは小学校六年だったと思う☆) A^-^;)”。

2007年5月23日 連載 (2周目・地球統一～ESPA) コメント (1)

(1頁目)

ティリー「ワ〜〜っ フォーラ!! フォーラっ!!」
(ジタバタバタバタ! と走ってくるティリー)

フォーラ「いったい何があったの!？」
ティリー「実は——」

ティリー「つまりねェ あーで こーで こーなって だから そーで そのとおりなの!」
(欄外に、「なんのこっちゃ」「マックス風(※)説明の仕方」「とか書いてある……☆」
(※「マックス」……三原順『はみだしっ子』のマックスのこと。)

フォーラ(独白)「なんですってェ? ファーストアロウを生徒が操縦!? バカな……!」
(ズキンと頭痛の擬音。)

——憎メ——
アレハオマエノテキダ! (謎の影と謎の声)
ズキィ…………ン!
フォーラ「アウッ」

(2頁目)

ティリー「フォーラッ!？」
(ダ……ンと気絶して倒れるフォーラ)
——憎メ!

さき・らんハオマエノ敵ダ
ナンノ苦モナク育ツタ娘ダ
代償ナシニ幸福ニナルコトヲ許スナ!
オマエノ過去ヲ思イダスノダ
思イダセ! 過去ヲ ——

(3頁目)

過去を—————？

ソレル「静かになさい！ さわぐんじゃありません」

(気絶したフォーラを抱き上げる)

ソレル「ティリス、ドクターを呼んできてちょうだい」

ティリー「はい、ソレル女史」(ホッと息をつく)

ソレル「ロジャー中央議長は地球使節かんげいじゅんびの指揮をとりなさい」

ロジャー「Yes! 教授(プロフェッサー)」

(4頁目) (フォーラの回想)

えーん えーん えーん (泣きじゃくる幼女)

姉「親がないからって泣いててはだめよ。フォーラにはねえさんがいるでしょ？」

フォーラ「うん」

(姉の棺)

フォーラ「姉さん！」

親戚「いらっしゃい！ あなたはおばさんの家でくらすんですよ！」

親戚「このやっかい者！」

(バシィ……ン と、頬を張るオバ)

(ガシャーン！ 家事の途中で壺を割るフォーラ)

親戚「出ておいき！」

..... (^◇^;)

ク、クサイ.....☆ くさすぎる.....っ☆

(キャラ設定?イラストあり)

1/26 若き日のソレル女史

1/28 サキ、11歳のとき。

ティリス・ヴェザリオ (リスタルラーナ人)

フォルル・シェットランド・ベルアイル (リスタルラーナ人)
(愛称フォーラ)

コメント



りす

2007年5月25日0:07

この際なので、いさぎよく暴露 (懺悔?) しておきますが、

「フォルル」と「シェットランド」と「ベルアイル」.....は、いずれも、小学校の時に学校で使っていた世界地図帳の頁を適当にパラッとめくって、目を閉じたまま適当な所に画鋏を「えいっ」とぶっさして、その周囲で目についた (気に入った) 地名をテキトーにつなげる.....という、ズサンな方法でもって、決めました☆

(^◇^;)>"

『 漫画のネーム☆ (2-4) 』 (@.....中学1年かな.....?? 「Gペン」入れてある☆)
A^-^;)”。

2007年5月24日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\) コメント \(1\)](#)

(1頁目)

ティリー「静かにしろ～～～」 (@教壇から怒鳴っている) (ワイワイガヤガヤ)

ティリー (みんな無視しやがって☆)

生徒「ねえフォーラはどうしたの？」

生徒「知らん」

生徒「委員長 (フォーラ) も教授 (プロフェッサー) もいないんじゃ授業が始まらないわ」

ティリー「そこしゃべるなァ！」 キーツ

生徒 (べー、だ)

(シュン.....と、自動ドア開く)

フォーラ「あら、ティリー、すごいさわぎじゃない！」

ティリー「フォーラッ」

ティリー「助けてェ！」 「みんなで私のことをバカにするのよォ！」

(オーバーアクションで泣き&抱きつく)

フォーラ「(ヨイケドネェ) ソレル女史はどうしたの？」

ティリー「いたらこんなに苦労しないわよ！」 「代理たのむわね！」

フォーラ「またァ!？」

ティリー「しょーがないでしょ、あなた、教課委員長の私より頭いいんだもの」 「全課目首席 (オールトップ) 」

フォーラ「ハイハイ」 (教壇に立って) 「フィルムNo.1801のA-5図を写して！」

ティリー (ため息をつきながらの独白) 『私13、フォーラは12、クラスの大半分は13か14。最低2年はかかる初等課を彼女 (フォーラ) は半分できりぬけた。』 『——今度の定期試験で彼

女（フォーラ）は実習生（インターン）になるだろう）』『全課首席（オールトップ）で教授（プロフェッサー）代理、——加えて中央委員長——』
『ハ　ねたみたくもなる』

（2頁目）

フォーラ「したがってこの公式は……」

ピンポン　ピンポン

アナウンス「緊急招集　緊急招集　中央委員はただちに第一通信室に集合せよ　くりかえす……」

フォーラ「あら、何かしら？」

フォーラ「各自自習してて」「ティリー教課委員長」

ティリー「Yes 中央委員長（フォーラ）」（ガタッと席を立つ）

（エレベーターで降下する二人）

（レトロSF風コンピュータールームの自動ドア開く）

フォーラ（敬礼して）「高等課（ハイクラス）中央委員長ならびに教課委員長、参りました」

ソレル「全員席につきなさい」「ただ今から地球使節団との直結通信を開始します！」

ティリー「地球（テラ!）」

フォーラ「地球（テラ）ですって！」

（生徒一同、ワッと盛り上がる）

通信士「電波受信（キャッチ）！！　大パネルにきりかえます！」

（静まりかえる生徒達と、ごくりとつばをのむフォーラ）

ピーユー（通信雑音／顔は見えない）

サキ「リスタルラーナ宇宙基地学校（スペース・ステーション・スクール）のみなさん、こちら地球使節団ファースト・アロウ号、司令室（キャビン）！」

(3頁目)

サキ「こちら地球使節ファースト・アロウ司令室（キャビン）！！ 生徒会長としてあいさつをおくります」「リスタルラーナS・S・S（スリーエス）のみなさん……」（ヘレナとセイを左右に従えた、サキのアップ）

生徒「聞いた！？ 生徒会長ですって！」

生徒「あの子フォーラより小さいのに！？

生徒「うそよ！ 信じられない！」

生徒「ハンサム♪」

ティリー「ピューウ（口笛の音）

お株とられたねフォーラ、せいせい12歳だよあの少年（コ）。ボーイソプラノだもの」

ティリー「ねえフォー………！………」「フォーラ………？」

（きつく青ざめているフォーラ）

ティリー『どうしたのかな、気分でも悪いのかしら………??』

(4頁目)

（フォーラの心象風景／雨の降りしきる中、立ちつくす孤独な少女）

マリア「よろしい、気がついたようだ」

（注射器を持つ女医、意識を取り戻すフォーラ、安堵するティリー）

マリア「ただの貧血だと思うがね、今日一日安静にしといで」「まったく何やったんだか知らないけど、人に心配かけないでくれよ」（コチトラいそがしいんだよ。）

フォーラ『——夢か——』『いやな夢——』

「ねえティリー、私どのくらい眠ってたの？」（ベッドから起きあがる）

ティリー「20分ぐらいだよ？」

フォーラ「え〜っ！？ ファースト・アロウはっ！？」

ティリー「さっきついたよ、だから急いで起こしたんじゃない」「ハイ制服（ユニフォーム）！」

」「ドク・マリアは一日眠らせとけていったんだけどね」「急がなきゃ遅刻するよ」

(5頁目)

フォーラ「OK!」(手早く制服に着替えるフォーラ)

(例によって.....未完☆ (^◇^;))

コメント



りす

2007年5月25日0:48

> 『私13、フォーラは12、

> 『ハ ねたみたくもなる』

.....懺悔するまでもない気がしますが.....(^◇^;)

萩尾望都の『トーマの心臓』とか竹宮恵子の『風と木のうた』とか.....パクった、

としか思えない設定でございます.....☆ (^◇^;) (^◇^;)(^◇^;)☆

リステラス星圏史略
古資料ファイル
7-3-0
『SSSの悲劇』

<http://p.booklog.jp/book/112730>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/112730>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト